

『子孫大黒柱』の教訓的手法：巻五-五を中心に

藤原，英城

<https://doi.org/10.15017/4741883>

出版情報：雅俗. 5, pp.14-17, 1998-01-10. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



『子孫大黒柱』の教訓的手法

—— 卷五—五を中心に —— 藤原英城

元禄末から宝永・正徳期にかけて刊行された一連の町

人物浮世草子は、それまでの好色本全盛の反動として位置付けられ、それらを特徴付ける要素のひとつとして教訓的姿勢が指摘される。もちろんそれらのすべてが教訓的姿勢で貫かれているわけではなく、多分に好色物的要素を含み、教訓内容も実用処世訓的なものから便宜的なものまでさまざまであるが、それが好色本に対する新しさを意図したものであったことは認められてよからう。

そうした一連の町人物の中で、ある種最も町人物的とも言える致富談的要素の濃厚な作品、すなわち西鶴の『日本永代蔵』（貞享五年正月刊、以下『永代蔵』）に正統に繋がる代表的な作品として、月尋堂の『子孫大黒柱』（宝永六年六月刊、以下『大黒柱』）と団水の『日本新永代蔵』（正徳三年正月刊、以下『新永代蔵』）を

挙げることができよう。

『新永代蔵』は『大黒柱』を意識して執筆されたことが窺え、当時反八文字屋勢力の一端を担った団水と月尋堂との関係を考える上で興味深いものがあるが、作品としては従来から『新永代蔵』に比して『大黒柱』の評価が高い。かつて江本裕氏は『永代蔵』の撰取の仕方を通して両書を分析され、『大黒柱』にわずかながらも文学性の窺えることを指摘された。すなわち『新永代蔵』には教訓意識や人間描写の平板さが顕著なのに対し、『大黒柱』には教訓的題材を小説化しようとする作家意識が見て取れるのである。

そこで本稿では、卷五—五「商人は心のはやがね」を題材に、『大黒柱』における月尋堂の作家意識を典拠の使用法と教訓意識のあり方を通じて考えてみたい。

卷五―五前半部を次に挙げる（私に英記号・傍線を付す。以下同じ）。

但馬の国出石の里に。貧者あり。……（A）何事もひだりまへにて。来る年もく同じ不仕合せなり。ある時肩のうへより五寸ばかりのもの落たり。……われはその方の身に日ごろ住ゐせし。貧乏神なりといふ。貧者よろこび。さてくうれしき事かな。此もの我付まとへばこそ。かゝる不仕合せのうちつきしなり。向後は手まへを取なをすべきといへば。貧乏神わらうていふやうさのみよろこびたまふな。その方の身の頂きより。足のつまさきまで。ひしと諸方の貧乏神あつまりゐてあまりゐどころがせり合て。我はをちたりとて。すがたはなく成ぬ。（B）貧者これより力をおとし。いよく貧苦にせまらん事を。心憂かなしさのあまり。ふとおもひ出し遠州無間寺の鐘をつく人は。かならず金銀を持といへり。たとへその罪にてみらいは。無間地ごくにしづむとまよ。現世にて一たび貧苦をのがれたしと。にわかにおもひ立て遠州さしてくだりける。京三条大橋まで行し所に。むかふより。江戸よりの早飛脚。息

をきつてはしりきたる。……往来これを立とまりて見ける中に。あれほどにはしればこそ。……それゆへよい金を取事なり。人は汗水をながさいでは。金はもうけられずといひけるを貧者聞より。いかさまたいていのはたらきにて。金はもうけがたし。これにつけても。無間の鐘といふも。まことの鐘にあらざ。胸鐘とて人の心ははやかねつくごとく。昼夜ゆだんなく世界に氣をくばつて。目を見出してかけあるき。うつかりとせぬ事成べし。もはやはるく遠江までゆくに及ず。今こゝにて無間の鐘をつきたり。これより工夫をつけて。とつてかへしける。……

この後貧者は一念発起して、出石に龍野屋六郎右衛門とてかくれなき分限者となるが、月尋堂はその結末を次のように結ぶ。

此人無間のかねをつきしゆへと。世にいふは心のはや鐘の事なり人は四十からも長者に成ぞかし

この話の教訓を端的に言えば、出世は心の持ちようという常識的なものとなるが、それを無間の鐘と関わせたところに作者の眼目がある。貧者を無間の鐘へと赴かせる契機となった貧乏神の挿話（A）は笑話的ではあ

るが、それは『百物語評判』（貞享三年六月刊、以下『評判』）巻三一五を典拠とする。^{注4}『評判』ではこの挿話に続けて問者が「もし此神候ふや、さ候はゞ万のぼけ者よりもおそろしき者にて御座候ふ^{注5}」と問うのに対し、儒教的合理主義者元隣先生でさえ「此神を窮神と名付けたり。……」と答えてその存在を否定しない。すなわち貧乏神は当時において案外現実問題としてあり、その切実さにおいて無間の鐘（B）へと繋がっていくのである。

無間の鐘は周知のように、それを撞けば現世での富貴は得られるものの、来世では無間地獄の苦しみに墮ちるとされる。たしかに無間地獄と引き替えに鐘を撞くその心情に一編の小説となるべきモチーフを見出すことは不可能ではないが、その結果として富裕になったとしても致富談としては成立しない。積極的な意味における教訓とはなり得ず、また否定的教訓とするには文学としては陳腐である。否定的教訓として意味を有するとすれば、それは唱導・勸化の世界においてであろう。事実『本朝故事因縁集』（元禄二年三月刊、以下『因縁集』）には次のように記される。^{注6}

慶長ノ初、摂州ノ商人無間寺ニ詣シ、鐘撞ベシト望。

住持曰、昔ヨリ此鐘ヲ撞人、金銀ニ榮富貴スルコト疑ナシ。然共未来ニテ無間地獄ニ墮、後世永子孫断絶スル事亦疑ナシ。商人曰、後世無間大地獄ニ墮在シ、子孫悉滅ストモ不苦ト云。……

評曰、金銀持人皆是大慾無道也。……惣シテ商人ハ、利慾ノ為ニ胸鐘ト云テ我胸ノ鐘ヲ朝夕撞、諸行ヲ勤、無常ノ慾ヲ以テ人ヲ寂滅スルガ即無間ノ鐘ナリ。是ヲ撞サル人ハ貧ナリ。如此見レバ、子孫是生滅法疑アルマジ。（巻二、五十五）

傍線部、特に無間の鐘を胸鐘とするところからも明らかのように、『因縁集』は『大黒柱』の典拠であった。

しかし、『大黒柱』は『因縁集』の唱導性（否定的教訓性）を致富談性（積極的教訓性）に転じており、『因縁集』が利欲に休むことなく撞き動かされる商人の心を否定的に無間の鐘に譬えたのに対し、その心を油断のない商人の才覚として肯定的に捉え直している。その手際は技巧的ではあるが、貧乏神から無間の鐘、改心への貧者の心の動きは当時の読者にとってある種切実な現実感を伴って受け取られたのではなからうか。

『評判』『因縁集』の使用は当時の趣向本位なあり方

の一面を物語ってはいようが、単に奇抜な趣向を求めたものとして片付けることはできない。なぜなら、月尋堂のそれらの使用は話に現実性を付与せんがためのものであったと考えることもできるからである。今日の目から見れば、それらに掲載される説話は非現実的なものではないが、当時の人々にとっては十分現実感を伴ったものであったに違いない。『評判』の怪事は当時それが信じられていたことを前提とするし、『因縁集』のような勸化本にとっては教化のための説話にいかにも現実性が備わっているかが肝要であった。教理が観念的であればあるほど、それを導く説話には現実性が要求されるのである。説話は教理・教訓に合わせて創作されるのであってその逆ではない。すなわち説話は虚構であって、その虚構の現実性が重要な課題となるのである。元禄頃から勸化本に事実性の強調が見られるという事実はそのことを裏付けよう。『因縁集』の説話はそういう意味において文学的現実性を有し、『評判』の怪事は素朴な現実性を有していたと言える。

月尋堂はその序に「無産の庸人の覚悟」として『大黒柱』を著したと言うが、当時の経済的現実には「無産の庸

人」が才覚によって致富できるような状況ではなかった。『永代蔵』的致富談は過去のものであり、「無産の庸人の覚悟」としての致富談は非現実的なものでしかあり得ない。現実に取材対象をもたない致富談は観念的にならざるを得まいが、それに現実性を付与するものは話の有する虚構の現実性のみであり、その際教訓は常識的であればあるほど一層現実味が増すことにならう。その意味において、『評判』から『因縁集』を経て常識的な教訓へと収束する手際は、作者の主体性・現実感覚の欠如としてではなく、より積極的に文学作品としての現実性を意識した作者月尋堂の手法として評価したく思うのである。

注

- 1 長谷川強氏『浮世草子の研究』（桜楓社、平3）。
- 2 「宝永・正徳期における致富談の研究」（『近世中期文学の諸問題 二』文化書房博文社、昭44）。
- 3 京都大学文学部蔵本。
- 4 拙稿『傾城難波みやげ』の刊行をめぐる（『近世文学俯瞰』汲古書院、平9）。
- 5 『続百物語怪談集成』（国書刊行会、平5）。
- 6 『大惣本稀書集成 第八卷』（臨川書店、平7）。
- 7 堤邦彦氏『近世仏教説話の研究』（翰林書房、平8）。